

## 文学フリマにて 田中拓也

昨年の十一月に東京流通センターで開催された「第二十三回文学フリマ」には過去最高となる七五四店が出店し、数多くの人が会場を訪れた。「文学フリマ」は文学作品の展示即売会。小説・詩歌・評論なんでもありの世界である。私自身も会場では、詩歌を中心に様々なブースを訪れ、同人誌や個人誌を購入して楽しんできた。

- ・ たてがみに触れつつ待った青空がわたしのことを思い出すのを
- ・ 犬の死骸に肉と土とが崩れあう夏。いつまでも眼だけが濡れて
- ・ 郵便の届かぬ土地に夕暮れはふつくと来てすはだかのそら

大森 静佳

まずは個人誌から。大森静佳『サルヒ』はモンゴルの遊牧民の家庭でのホームステイ体験にて詠んだ作品をまとめた小冊子。本人が撮影したモンゴルの草原の写真も美しい。

- ・ 今朝父は紺のベストを羽織りおり曼珠沙華もう茎だけとなり

遠藤 由季

- ・ ふわふわと空ばかり見て地に種を蒔かず育てず過ぎたる時間
- ・ 硝子戸の向かうにひとつ草雲雀をるらし くらき長月だつた

後藤由紀恵  
高木 佳子

- ・ 胸底に舟をいくつも沈ませて四十代の夕なぎにいる

錦見映理子

四十代を中心とする女性歌人で結成した「ロクロクの会」の『66』には十二人の作品が掲載されている。ほぼ同世代ということもあり、素直に共感できる歌が多かった。また、同誌の中の企画「近現代の女性歌人の歌を読む！」も読みごたえがあった。

- ・ 夏は来ぬを夏は絹だと思つてた川面は風がひからせていた
- ・ 古本に引かれた線をなぞりつつ二度は会わない人の多さよ
- ・ 暴力的に照つた水面を夢にみてそのまぶしさが連れてきた朝

佐伯 紺

同人誌『羽根と根』五号は一九九〇年代以降生まれの十一名の作品から成っている。特徴は「連作」。五十首近い連作には迫力を生かして実行している点に注目した。

- ・ しんしんと眠りに落ちる教室に友情はさして要らないらしい
- ・ だれもない教室ですらさん付けを貫くあなたの胸を噛みたい

越田 勇俊

- ・ みなそこにひかりの青を飼いそこね炉はいくつもの銀河の鏡

坂本 七海  
ネムカケス

『東北大短歌』第三号は作品・評論ともに充実の一冊。誌面の構成もしつかりとしており、総合誌に近い感覚のある一冊であった。ほかに『サラダ記念日』を様々な視点から検証した評論が中心の『Tri』第四号。作品・座談会ともに自由な雰囲気の特徴の『穀物』第三号など紹介したい冊子がまだまだあるが誌面が尽きてしまった。「既成の文壇や文芸誌の枠にとらわれず〈文学〉を発表できる『場』」（文学フリマ公式サイトより）とし「文学フリマ」は確実に根付きつつあるようだ。